

し え ん 便 い

R6 年 12 月
発行



子どもたちの可能性を開く“居住地校交流”

特別支援学校に通っている児童生徒が、自分の住んでいる地域の小・中学校に行き、学習や学校行事等に参加することを、居住地校交流といいます。

新宮市に位置している本校には、東牟婁全域から児童生徒が登校しています。将来、地域で生活していく上で自分の居住地での生活を豊かに、また同年代の児童とのつながりを大切にしていくために、児童の実態に合わせて居住地校交流を実施しています。

今年度は、小学部で30名を対象に、11校の小学校で交流を行いました。

担当した教員は、こう感じています。



*はじめて交流を行う児童を引率するとき、最初の打ち合わせで『はじめての交流だから遊びを通して関係づくりができたらいいいね』と、交流校の先生にも同じ思いをもっていただけたことを嬉しく思いました。お互いが好きな授業＝図画工作という共通点から、空気砲作りを行い、自分の好きな色や物で飾り付けることで“お互いを知る”“お互いの得意(好き)なこと”を自然な形で知り合うことで交流がうまれ、学習をすすめることができました。

*複式学級との交流は学年をまたいで行われるため、内容の選択に悩むことがあります。そこで今回は“少しチャレンジしてみよう”ということで、「いつもと違う場所を探検してみたい!」というみくまの児童の希望と、1学期に交流校の児童が生活科で取り組んでいた「学校探検」のコラボレーションが実現しました。お互いの学校のことを知ることで見えてくる友達の学校生活の様子や、お互い学校の違いまで発見することもできました。また、お互いの好きな遊びを知ることでも会話も弾み、交流を深めることができました。

好きなこと、得意なことを少しでも伝え合う機会を作ることでそこから子どもたちは自然に交流を始めていきます。そのきっかけはいつも「お互いの得意をいかす」という視点が大切なエッセンスであると交流学習から学ばせていただいています。

きこえとことば・みえかた相談会



第2回が台風の影響で中止になりましたので、第3回相談会(12/6)につきましては、新たに募集を行わず第2回に申し込みのあった方の相談を実施いたしました。関係各所の皆様にはご理解いただきましてありがとうございました。相談に来られた皆様からは「丁寧に教え

ていただきありがたかった」「気になることを聞けてよかった」など感想をいただいています。

今年度の相談会はすべて終了となりました。見え方・きこえ方で相談したい方は盲学校、ろう学校、南紀はまゆう支援学校等での巡回相談は随時行っていますので、それぞれの学校にお問い合わせください。



和太鼓の「響き」のインクルーシブ的考察

みくまの支援学校高等部の実践から

みくまの支援学校高等部では、開校当初から秋の文化祭で和太鼓の演奏に取り組んでいます。今年も高等部総勢35名で東京都の無形文化財「三宅太鼓」を披露しました。

高等部全員で取り組む和太鼓、もちろんそこには力が強かったり弱かったり、大きな音が苦手だったり、また体思うように動かせなかったり、車椅子を利用しているなどさまざまな生徒の姿があります。そんな多様な彼らの叩く和太鼓の音が一つにまとまることはともすれば奇跡のように思えるのですが、毎年曲の後半、フィナーレに向かって全員で打ち込む時、その「奇跡の瞬間」は必ず訪れるのです。



体育館の2階の窓ガラスをも震わせるあの圧倒的な音の塊はどうしてうまれるのだろう。なぜ「奇跡」は毎年繰り返されるのだろう。

私は、みんなが同じ強さで、同じタイミングで打っても、あの深く、重厚な音にはならないのではないかと思います。長いバチで打つ生徒、短いバチで打つ生徒、早いタイミングや少し遅れて打つ生徒の音、そして聞き合い、見つめ合い、同調していく呼吸、友だち同士のかけ声、そこには動く左手で一所懸命にバチを振り下ろした A さんの音も、イヤーマフを着けながら慎重にリズムを追った B さんの音も、教師といっしょに別室で小さな太鼓を叩いた C さんの音も、それら全てが響きの中には歴然と存在し、そしてそれらが重なりってあの心をも揺さぶる「音」になるのではないか。あの響きを生み出すのは多様性を尊重し合いながら、つながり合おうとする生徒たちの「集団の力」に他ならないのではないか。

「そうか！和太鼓の響きは奇跡ではなく必然だったんだな！そうだったら、この音が全ての学校の垣根を取り払い、響き合ったら、いったいどんなすばらしい音になるのかなあ〜」と、私は毎年新鮮な感動の中で思うのです。

Co 浦木

参考文献：荒川智 越野和之「インクルーシブ教育の質を探る」.全障研出版部.2013

